

## 〜竹取物語〜

「竹取物語」といえば、皆さんもよくご存じのかぐや姫の物語です。この物語は『源氏物語』の中にも「物語の出で来はじめの親なる竹取の翁」（絵合の巻）と書かれており、日本で最古の物語のひとつとされています。

この『竹取物語』には、かぐや姫が5人の求婚者に対して、無理難題をなげかけるといふ有名な場面があります。その求婚者のひとりが右大臣阿倍御主人でした。かぐや姫は御主人に、唐にある火鼠の皮衣がほしい、と伝えます。この皮衣は火で焼いても燃えない、というのです。

御主人は、その年、日本にやってきた「王けい」という人物が唐にいるのを知って、腹心の部下「小野のふさもり」に金を持たせて、唐に派遣してこの皮衣を買い求めさせることにしました。ふさもりは、唐より帰り、さらに七日で筑紫より上京して、皮衣を持参します。「王けい」からの手紙には、金が不足したので、さらに金50両が必要だ、とありました。もちろん御主人はこれを支払い、念願の皮衣を手に入れたのでした。

御主人は、この皮衣を持って、意気揚々とかぐや姫を訪ねますが、試みにこれに火をつけてみると、燃えないはずの皮衣が、めらめらと燃え



あがつてしまったではありませんか。つまり、この皮衣は真つ赤な偽物だったということです。さて、ここで注目したいのは「王けい」という人物です。「王けい」は唐と日本を往来していた商人として描かれています。御主人は、この「王けい」に皮衣の購入を依頼したのでした。

当時、商人たちの交易を管理していたのは大宰府でした。そこで歴史史料を繙いてみると、たとえば仁寿3（853）年、渡唐する延暦寺僧円珍に大宰府が発行した公驗（渡航許可証明書）によれば、円珍とその従者の一行は、大唐商人王超らが帰国する船に同乗する、とあります。また、これは少し後の史料になりますが、承暦3（1079）年、日本の医師の派遣を求めて高麗国礼賓省が大宰府に宛てて発給した牒には商客王則貞という人物が登場します。このようにみると、『竹取物語』にあらわれる「王けい」という人物は、この当時、実在した王という姓の商人を念頭において語られているのではないかと考えられます。近年、文学作品を歴史的に読み解こうとする試みが多くありますが、これもその一例といえるでしょう。